

主体的に問題を追究し、よりよい未来について考える生徒の育成
～2年地理「ストローから見るプラスチックごみの未来」の実践を通して～

I 主題設定の理由

2022年9月、本学級の生徒37名を対象に社会科アンケートを実施した。右の資料1はアンケートの回答の一部である。

本学級は、社会科の授業に前向きに取り組む生徒が多い。「社会科の授業は楽しい」という質問項目に対して、肯定的な回答が過半数を超えている。理由を問う自由記述欄には、「新しい知識を得るのが楽しいから」という回答や、「絵や図から分かることを話し合うのが楽しいから」という回答が見られた。

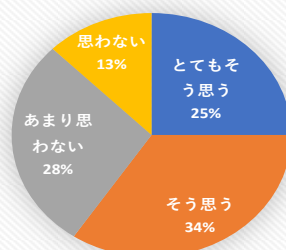
一方で、「授業を通じて新たに調べたいことが思いつく」という質問項目では、「とても思う」や「そう思う」の割合が低い。「日本の気候の特色」の学習では、提示した雨温図が日本のどの地域のものか、生徒は意欲的に追究したが、「なぜ地域によって気候に違いが生まれるのか」や「地球温暖化による気候の変化は、これからの自分の生活にどう影響するのか」など、新たな疑問をもったり、自分のこれからの生活につなげて追究を深めたりする姿はあまり見られなかった。この事実から、本学級の生徒は教師から与えられた課題について興味をもって追究することはできるが、自ら問題を見いだして主体的に追究したり、学習したことを基にしてよりよい未来について考えたりすることはあまりできていないと考えた。

以上を踏まえ、生徒自らが問題を見いだして主体的に追究したり、学習したことを基にしてよりよい未来について考えたりする生徒の姿を目指し、本研究の主題を設定した。

資料1 社会科アンケートの回答
(2022年9月実施)

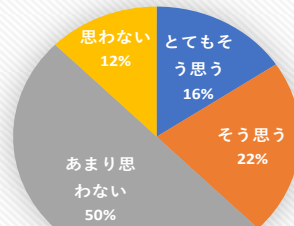
円グラフ1

Q1 社会科の授業は楽しい



円グラフ2

Q3 授業を通じて新たに調べたいことが思いつく



【研究主題】

主体的に問題を追究し、よりよい未来について考える生徒の育成

II 研究の構想

1 目指す生徒像

本研究では、「主体的に問題を追究する姿」と「よりよい未来について考える姿」の2つの生徒の姿の実現を目指す。それぞれ、より具体的にはどのような姿を指すのか、以下のように定義をする。

(1) 主体的に問題を追究する姿

本研究における「主体的に問題を追究する姿」は、疑問に思ったことを基に自ら問題を立てたり、知りたいという思いや調べたいという思いを高めて問題の追究をしたりする姿とする。例えば、飲食店がプラスチック製のストローを紙製のストローに変えたことについて、変えた背景や影響について調べたいことを自分で考え、追究する姿である。

(2) よりよい未来について考える姿

本研究における「よりよい未来について考える姿」は、問題の追究を通して、これからの社会の在り方について考えたり、問題解決を通じて学んだことを自分の生活につなげて考えようとしたりする姿とする。例えば、環境問題の解決には国民一人一人の意識と行動の変容が必要であると考え、具体的に自分の意識や行動を見直そうとする姿である。

2 研究の仮説と手立て

目指す生徒像に迫るため、本研究では以下2つの仮説を設定する。また、2つの仮説に対して、それぞれ2つずつ具体的な手立てを講じる。

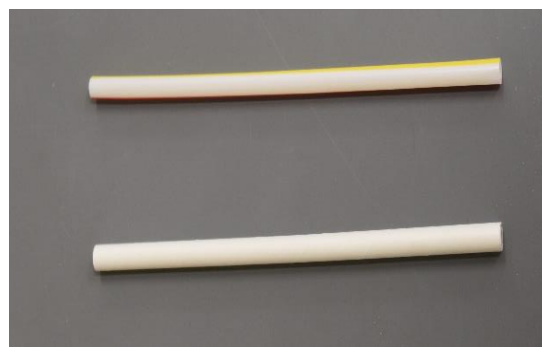
【仮説1】

生徒の興味関心を高める教材提示の工夫をしたり、視点を整理する構造的な板書の工夫をしたりすれば、生徒が自ら問題を見だし、知りたいという思いや調べたいという思いを高めて、主体的に追究に臨むことができるだろう。

＜仮説1に対する具体的手立て①＞興味関心を高める教材提示の工夫

本研究では、単元の導入で、「ストロークイズ」を実施する。「ストロークイズ」とは、提示したさまざまなストローが、それぞれどこで使われているかを当てる活動である。特に「ストロークイズ」を通して、資料2のストロー2本に出合わせる。資料2は日本マクドナルド株式会社（以下、マクドナルド）が以前より提供してきたプラスチック製ストローと、2022年10月から全国で導入した紙製ストローの実物の写真である。クイズを通して、身近な飲食店のストローの変化を知り、実物に触れて材質を比較することで、生徒はマクドナルドがストローの材質を変えたことについて興味関心を高めるだろう。

資料2 マクドナルドが提供するプラスチック製ストローと紙製ストロー



＜仮説1に対する具体的手立て②＞視点を整理する構造的な板書の工夫

調べた事実を出し合う話し合いの場において、生徒個々の追究の視点を整理する構造的な板書の工夫をする。例えば、マクドナルドが紙製のストローに変えたことについての話し合いでは、プラスチック製のストローのメリットとデメリット、紙製のストローのメリットとデメリットを分けて板書する。視点ごとに分けて板書をするすることで、プラスチック製と紙製のどちらがよいのかさまざまな視点から捉え直し、追究したい問題を生徒自らが見いだせるようにする。

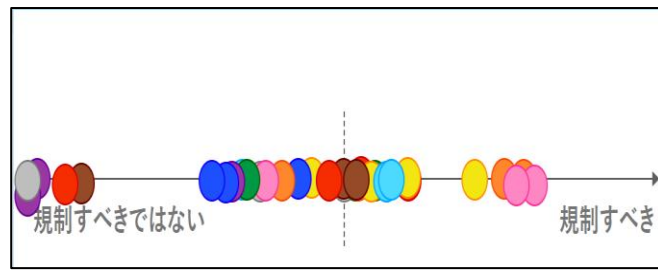
【仮説2】

生徒一人一人の立場を明確にした関わり合いの場を設定したり、これからの社会の在り方について考えたり、見方や考え方を広げる資料の提示をしたりすれば、問題の解決を通じて学んだことを自分の生活に生かそうとしたりすることができるだろう。

＜仮説2に対する具体的手立て③＞個々の立場を明確にした関わり合いの場の設定

本研究では、単元中盤の深める段階でタブレット端末に備わるポジショニング機能を活用する。ポジショニング機能とは、数直線上に自分の考えを表し、理由を入力する機能である。例えば「日本はプラスチックを規制すべきか」という問題について、すべきか、すべきではないか、数直線上で自分の立場を明確に示して記録をさせる。話し合いの前に、資料3のように全員のポジショニングを重ね

資料3 タブレット端末のポジショニング機能で全員の考えを重ねて表示した画面。
(数直線上のマークをクリックするとそれぞれの理由を見ることができる。)



てタブレット端末に提示し、全体の意見の傾向とともに、それぞれがどのような理由を書いているか、互いに読み合う時間を設けてから話し合いに臨ませる。それぞれの立場を明確にすることで、自分と似た意見や正反対の意見に触れ、よりよい社会の在り方について揺れ動きながら自分の考えを深める生徒の姿を期待したい。

<仮説2に対する具体的手立て④>見方・考え方を広げる資料の提示

資料4は紙ストローに対する世界各国の動向の一部を示す資料である。世界では多くの国や地域でプラスチック製ストローを禁止する動きがある。ストローに限らず使い捨てプラスチックや、プラスチック製品そのものを禁止したり、廃止したりする地域も多く存在する。

本研究では、例えば環境のためにプラスチック製品を削減していくべきであるという考えが出されたときに、資料3を提示する。「禁止」という厳しい規制をする世界各国の動向に視野を広げ、日本はプラスチック製品についてどう対応すべきなのか、よりよい社会の在り方について自ら興味をもったことを調べる生徒の姿につなげたい。

資料4 紙ストローに対する世界各国の動向の一部	
中国	2021年からリサイクル不可のプラスチックの使用を禁止。全国の飲食業界で使い捨てストローが使用禁止に。
インド	ストローなど最大6種類の使い捨てプラスチック製品が禁止される予定。2022年には全面禁止へ。
フランス	2021年1月1日～プラスチック製ストローの使用禁止。
カナダ	2021年までに使い捨てプラスチックの使用を全面禁止にする方針を発表。

3 研究単位について

(1) 教材について

本研究では、中学校社会科学学習指導要領の地理的分野、「C(2)日本の地域的特色と地域区分①自然環境」の単元「ストローから見るプラスチックごみの未来」を扱う。

昨今、海の生物に悪影響を与えるなどして、プラスチックごみの問題は世界中で注目を集めている。日本でも、2022年4月1日より「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」が施行された。レジ袋の有料化など、生徒にとっても身近なところでプラスチックごみ削減の取り組みは始まっている。本研究の単元では、生徒にとって身近な企業であるマクドナルドが提供する紙製ストローを導入で扱う。生徒の多くは、自身の経験を基に、はじめは消費者の視点で紙製ストローについて考えるだろう。追究を通して紙製ストローと環境問題との関連に気付いた生徒に、世界のプラスチック規制の動向の資料や、日本で施行された「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」を提示する。世界と日本との違いに触れたり、日本で施行されたばかりの法律を知ったりすることで、日本の現状を捉え、よりよい未来について考えようとする生徒の姿につなげたい。

本単元で扱うプラスチックごみの問題は、国の取り組みや企業の取り組み、消費者の意識や行動など、さまざまな立場の考え方が複合的に関連しており、生徒は自分の興味関心に応じて、さまざまな視点から追究を深めることができる教材である。

以上より、生徒の主体的な追究とよりよい未来について考える姿の実現に適していると考え、次節のように単元の計画を立てた。

(2) 単元の計画(9時間完了)

学習内容と生徒の思考		手立て
○さまざまなストローを比べる。① ○マクドナルドがストローを紙製に変えたことについて調べる。②③		手立て① 教材提示の工夫

出 合 う	○マクドナルドがストローを紙製に変えたことについて話し合う。④ 生徒の思考① プラスチック製ストローは環境に悪影響を及ぼしている。プラスチックは減らしていくべきだ。海外のように厳しく規制すべきではないだろうか。	手立て② 視点を整理する構造的な板書の工夫 手立て④ 見方・考え方を広げる教材の提示
深 め る	<問題>日本はプラスチックを規制すべきか。 ○日本はプラスチックを規制すべきかどうか調べる。⑤⑥ ○日本はプラスチックを規制すべきかどうか話し合う。⑦ 生徒の思考② 日本が施行した法律は、国や地方の取り組みはもちろん、企業だけでなく個人の意識や行動の変容の必要性についても訴えかけている。	手立て③ 個々の立場を明確にした関わり合いの場の設定 手立て② 視点を整理する構造的な板書の工夫 手立て④ 見方・考え方を広げる教材の提示
生 か す	○追究のまとめをする。⑧ 生徒の思考③ プラスチックごみの問題は、企業だけの取り組みでは解決せず、国や地域はもちろん自分たちの意識や行動も変えていかなければならない。これまで何気なく使ってきたストローなど、身近なものも自分でよく考えて使っていきたい。 ○単元の振り返りを行う。⑨	

4 仮説の検証方法

本単元では生徒1名（生徒A）を設定し、生徒Aの話し合いの中での発言やワークシートの記述の内容の変容から仮説を検証する。

（1）生徒の実態

資料5は生徒Aの社会科アンケートの回答の一部である。社会科の授業については前向きに取り組んでおり、意欲的に調べ学習に臨む姿も見られる。一方で、「授業を通じて新たに調べたいことが思いつく」や「授業で学んだことが自分の将来に役に立つと思う」という質問項目には「あまり思わない」と答えている。

「日本の気候の特色」の単元では「日本の気候の特色はどのように分けられるか」という課題について追究した後、授業感想に資料6のように書いた。分かったことを中心に記

資料5 生徒Aの社会科アンケート回答

Q1	社会の授業は楽しい
回答	そう思う
Q3	授業を通じて新たに調べたいことが思いつく
回答	あまり思わない
Q6	授業で学んだことが自分の将来に役に立つと思う
回答	あまり思わない

資料6 「日本の気候の特色」生徒Aの授業感想

日本の気候は6つに区分されることが分かった。それぞれに気温や降水量に特徴があることも分かった。太平洋側の気候と中央高地の気候、瀬戸内の気候は、雨温図が似ていて見分けが難しいなと思った。

述をしており、そこから考えたことや、疑問に思ったこと、さらに調べたいことについての記述はない。

また、「授業で学んだことが自分の将来に役に立つと思う」という質問項目の自由記述欄には、「何かに役に立つときがくるのだろうけど、それが何かはまだ分からない」と書いた。学習したことが、実際の社会や自分の将来にどのようなつながるかはあまり気にしていない様子であることが分かった。

（２）生徒Aに期待する姿

・教材提示の工夫や、構造的な板書の工夫を受けて、社会的事象について主体的に追究し、自らの言葉で問題を見いだす姿。

・立場を明確にした関わり合いの場や、見方・考え方を広げる資料との出会いを通して、追究したことを基に、よりよい社会の在り方や、学んだことを自分の生活につなげて考える姿。

Ⅲ 実践と考察

１「わざわざ紙製にする理由が何か調べてみたい」【仮説１：手立て①】

第１時、さまざまなストローが入った封筒をグループごとに配付してから、次のように聞いた。「封筒の中身のストローは、それぞれどこで使われているストローでしょう」。

（手立て①）この「ストロークイズ」を始めると、生徒はすぐにグループで予想を言い合った。「これ、給食のストローじゃないかな」という声が上がると、「そう思う」という共感の声がグループ内で上がるなど、活発な話し合いが起こった。

グループごとに「ストロークイズ」の答えを確認すると、２つのストローに注目が集まった。黄色と赤のしま模様のストローを、全てのグループが「マクドナルド」のものであると予想したが、白色のストローについては「マクドナルド」のものであるとするグループは２つと、後のグループは「分からない」と答えた。すると、「最近マクドナルドに行ったら、この白いストローで出てきた」という生徒の生活経験が出された。その発言を聞いて、「そうなんだね」という生徒から驚きの声が上がった。

そこで、「ストロークイズ」の答えと、2022年の10月からマクドナルドで白いストローの提供が始まったことを知らせた。生徒たちは２本のストローを手にとって、自然と比べ始めた。

資料７は注目を集めた２本のマクドナルドのストローについて、気付いたことをワークシートに記入している場面である。気付いたことを発表する時間を設けると、材質に注目して、「プラスチックと紙の違い」と述べる生徒や「紙製の方が簡単に壊れそう」と述べる生徒、「紙製の方は、飲んでみると紙の味がしてしまいそう」と述べる生徒がいた。

生徒Aは、第１時の「ストロークイズ」に積極的に参加していた。ストローを何度も手に取

資料７ さまざまなストローを比較し、気付いたことを記入する生徒の姿



資料８ 生徒Aの第１時の振り返り

マクドナルドで提供されるストローが、白い紙のものになってことを初めて知って驚いた。ストローを比べてみて、私は紙製よりプラスチック製の方がよいと思った。なぜかという、すぐにふにゃふにゃになりそうだし、紙が水に溶けて味が変わってしまいそうだと思ったからだ。わざわざ紙製に変える理由が何か調べてみたい。

り、グループの仲間に自分の予想を伝えていた。生徒Aは白いストローがマクドナルドのものであることを知らなかったようで、正解を発表したときにとっても驚いた様子だった。

前頁資料8は第1時の生徒Aの振り返りである。ストローの材質について、消費者の立場から「紙製よりもプラスチック製の方がよい」という考えを示している。また、「わざわざ紙製に変える理由が何か調べてみたい」と記述している。これは自ら抱いた疑問についての記述である。

また、第2時と第3時は、マクドナルドがストローを変えたことについて、それぞれに興味をもったことを調べる時間を設けた。以下の資料9と資料10は、それぞれ生徒Aの第2時、第3時の追究後の振り返りである。

資料9 生徒Aの第2時の振り返り

マクドナルドが紙製ストローに変えたことは、海洋性プラスチックゴミの問題が影響していた。(中略)いろいろな企業を動かすほどの、海洋性プラスチックごみの問題について、もっと詳しく知りたい。



資料10 生徒Aの第3時の振り返り

海洋性プラスチックは半永久的に分解されず、2050年には海の生物の総量より多くなることが分かった。この事実を知って紙製にすることに賛成する立場に変わった。みんなはどんなことを調べたのか聞いてみたい。

資料9では「海洋性プラスチックごみの問題について、もっと詳しく知りたい」と述べており、資料10では「みんなはどんなことを調べたのか聞いてみたい」と述べている。これらは生徒Aが教材への興味関心を高めた姿であるといえるだろう。

以上より、さまざまなストローを比べる「ストロークイズ」という教材提示の工夫が、生徒Aの教材に対する興味関心を十分に高めたと考えられる。また、プラスチック製と紙製のストローの実物を比較させることで、生徒Aは「なぜ紙製に変えてしまったのだろうか」という疑問を抱き、自分が抱いた疑問をきっかけにして追究を連続させている。これは、生徒Aが知りたいことを自ら考え、主体的に追究に臨む姿であるといえるだろう。

2「日本もプラスチックを規制した方がよいのではないか」【仮説1：手立て②】【仮説2：手立て④】

第4時は話し合いを行った。テーマは「マクドナルドがストローを紙製に変えたことについて」である。生徒はそれぞれに追究したことを発表していった。

まず紙製ストローのメリットが多く挙げられた。「マクドナルドは、ストローを紙製にすることで年間約900トンのプラスチックを削減することができる」といった意見や、「紙製ストローは分解が早く、自然に帰る素材である」といった意見である。

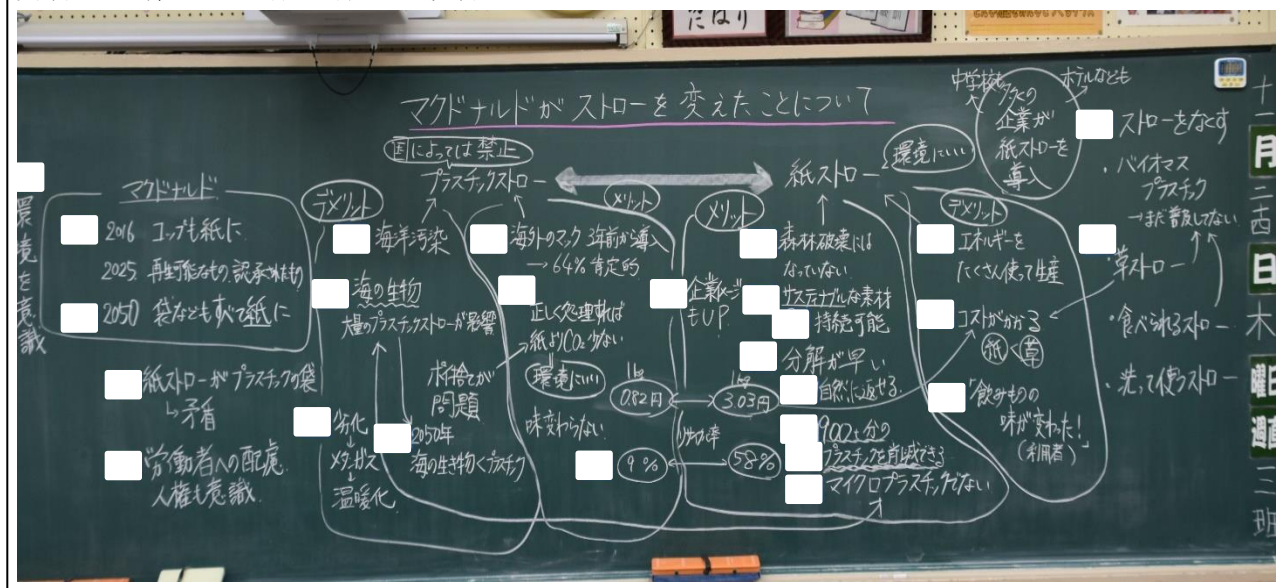
続いて多く挙げられたのは、プラスチック製ストローのデメリットである。「プラスチック製ストローは、世界中で海の生物に悪影響を与えている」といった意見や、「2050年には海洋性プラスチックごみの総量が、海の生物の総量を超える予測が出されている」といった意見が出された。

プラスチック製ストローのデメリットと、紙製ストローのメリットを板書に整理していくと、マクドナルドがストローを変えた理由について、生徒たちも理解ができた様子だった。しかし、「紙製に変えても、森林破壊の問題があったり結局ごみは出ていたりする」といった意見や「プラスチックごみもポイ捨てが原因であって、適正に処理をすればコストは安くて済む」などの、紙製のデメリットやプラスチック製のメリットも出されていた。これらの意見を、メリットとデメリットを視点として、次頁資料11のように整理して板書していった。

プラスチック製と紙製のストローのメリットとデメリットがさまざまに出されたところで、「ストローを紙製に変えることに賛成か」と聞いてみると、困ったような表情をする

生徒が多くいた。

資料 11 第 4 時の話し合いの板書



そこで、生徒に右の資料12を提示した。（手立て④）資料12はプラスチックに関する世界各国の動向の一部を示している。

プラスチック製品について厳しく規制する世界の動向を知り、「日本もプラスチックをもっと規制すべきなのではないか」と振り返りに書いて、自分の考えを発表する生徒がいた。

第4時、生徒Aは話し合いに積極的に参加をしていた。「海洋性プラスチックごみは、2050年に海の生物の総量よりも多くなってしまう」など、プラスチック製ストローのデメリットについて意見を述べ、プラスチックについて危機感を高めている様子であった。

資料13は第4時の生徒Aの振り返りである。「どちらのメリットとデメリットに関しても、環境に配慮することが大事だと気付いた」と記述している。プラスチック製と紙製のストローのメリットとデメリットをそれぞれに把握し、環境への配慮にどうつなげるかが大事であるという新たな気付きを得ている。この気付きは視点ごとに整理した板書によって得られたと考えられる。しかし、視点を整理した板書だけでは、生徒

Aは自ら問題を見いだすことはできなかったと考えられる。板書よりも、資料12を提示したことにより「日本もプラスチックを規制したほうがよいのではないか」という問題意

資料 12 プラスチックに関する世界各国の動向の一部

中国	2021年からリサイクル不可のプラスチックの使用を禁止。全国の飲食業界で使い捨てストローが使用禁止に。
インド	ストローなど最大6種類の使い捨てプラスチック製品が禁止される予定。2022年には全面禁止へ。
フランス	2021年1月1日～プラスチック製ストローの使用禁止。
カナダ	2021年までに使い捨てプラスチックの使用を全面禁止にする方針を発表。

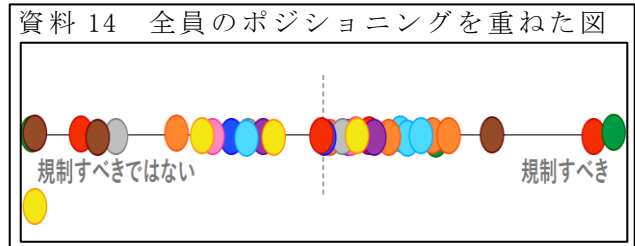
資料 13 生徒Aの第4時の振り返り

今日はストローが紙製に変わったことについて話し合ったが、プラスチックにも紙にもメリットやデメリットがあることが分かった。でもどちらのメリットとデメリットに関しても、環境に配慮することが大事だと気付いた。特にプラスチックが海に流れ出るとは大きな問題だと思う。外国では禁止をしているところもあるようなので、日本もプラスチックを規制した方がよいのではないかと思った。

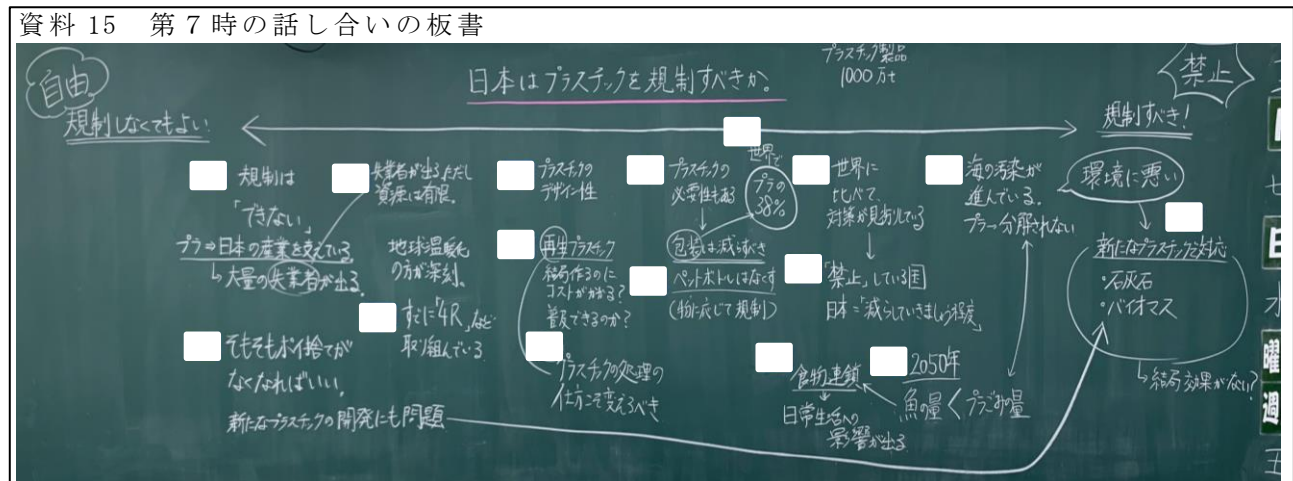
識を高めている。以上より板書は考えを整理する手助けとなり、見方や考え方を広げる資料提示によって、生徒Aが自ら問題を見いだすことにつながったといえるだろう。

3「自分にできることから私も行動していきたい」【仮説1：手立て②】【仮説2：手立て③、手立て④】

第5時と第6時は一人調べの時間を設けた。前時の振り返りで生徒の多くから挙げられた、「日本もプラスチックを規制すべきではないか」という問題について、生徒はそれぞれに追究していった。規制すべきかどうかについて、毎時間の終わりにポジショニングを用いて自分の立場と考えを記録する時間を設けた。すると、「規制すべき」と「規制すべきではない」の間で考えが揺れ動いている生徒が多くいた。第6時の最後には、資料13のように生徒全員のポジショニングを重ねて提示し、互いの意見を見合う時間を設けた。（手立て③）

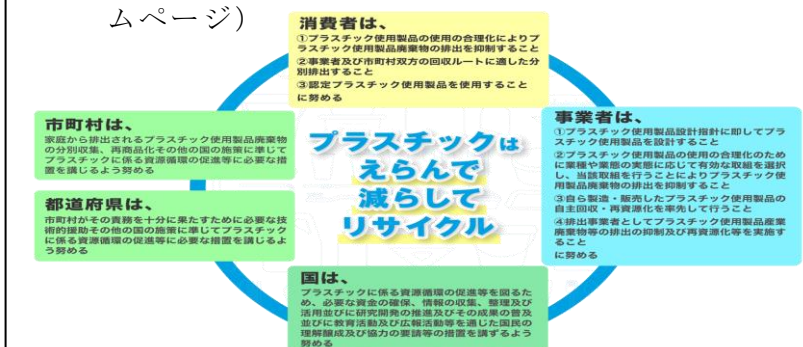


第7時、追究したことの話し合いを行った。話し合いでは、「規制すべき」という意見がはじめに出た。「プラスチックゴミの問題は、人体への影響も出始めているから厳しく規制すべき」という意見や、「日本は過剰包装の文化があるので、国や地域が規制をかけないと変わらない」という意見である。それに対して、「規制すべきではない」という立場から反対意見が出た。「プラスチックも適正にリサイクルして処理すれば問題はない」という意見や、「日本のプラスチック産業は盛んで、規制すればそれだけ雇用が失われてしまう」という意見が出て議論が巻き起こった。規制すべきか、すべきでないか、生徒から出される意見を資料15のように左右に分けて構造的に板書し、出される意見を整理していった。（手立て②）



さまざまな意見が出されたところで、「規制の有無でプラスチックゴミの問題は解決するのか」を生徒に問いかけた。すると、生徒は考え込んでいた。そこで2022年4月に施行された「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」に関する資料を提示した。（手立て④）ほとんど

資料16 「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」によって目指す社会の図（環境省ホームページ）



の生徒が、この法律について「あまり知らない」ようだった。法律の簡単な内容と、前頁資料16のような基本理念の図などを提示してしばらく読む時間を取り、振り返りを書かせた。振り返りの発表では、「国、都道府県、市町村それぞれがやるべきことを明確にしてそれぞれの立場でプラスチックごみを減らしていかなければならない」といった意見や、国や事業所に限らず、消費者として自分たちも行動を変えていかなければならない」といった意見が出された。

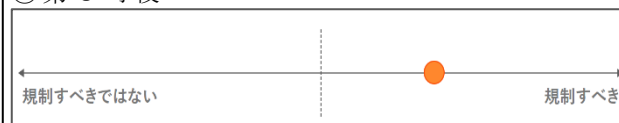
最後に、第8時と第9時は追究のまとめと単元の振り返りを行った。単元を通じて自分の考えがどのように変化したかを生徒はそれぞれに振り返り、最後の自分の考えをレポートに書いて単元を終えた。

生徒Aは第5時と第6時の追究で考えが揺れ動いていた。資料17は生徒Aのポジショニングの記録である。生徒Aが「規制すべき」から「規制すべきではない」の方へ考えを変えていく様子が分かる。第7時の話し合いには、ポジショニングを中央にして臨んでいたが、「雇用が失われる」という仲間の発言に「プラスチック産業は日本の経済を支えている。厳しい規制を今はすべきではない」という付け足しをするなど、「規制すべきではない」という立場の意見を聞いて、自信をもって発言する様子も見られた。これは、手立て③の立場を明確にさせた話し合いの場の設定が有効に働き、生徒Aがよりよい社会の在り方について考えることにつながったと考えられる。

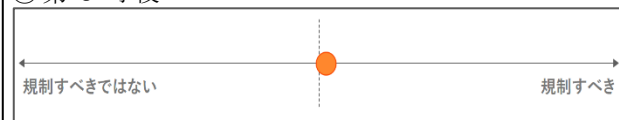
また、資料19は第9時に生徒Aが書いた単元の振り返りである。「私は、はじめマクドナルドが紙ストローにしたことに反対の立場でした」という書き出しが、最後は「これからの生活で、紙ストローを選んだり、過剰な包装を断ったり、エコバックを持ち歩くなど、自分にできることから私も行動していきたい」という書き出しになっている。

資料 17 生徒 A のポジショニングの変容

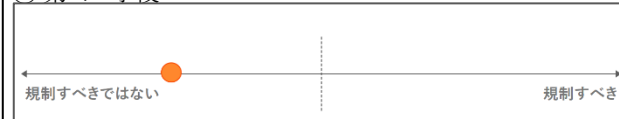
① 第 5 時後



② 第 6 時後



③ 第 7 時後



資料 19 生徒 A の単元の振り返り

私は、はじめマクドナルドが紙ストローにしたことに反対の立場でした。紙の味がしたり、すぐふやけたりするのが嫌だったからです。しかし、調べたりみんなと話し合ったりするうちに考えが変わっていきました。プラスチックごみは生き物を通して人体にも影響していたり、2050 年には海の生物の総量を超える予想があったりすることも知りました。それを知って、環境のためにプラスチックを規制すべきだと思いました。でも、日本はプラスチックの産業が盛んで、多くの事業所があることや、「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」が目指すのは、国も企業も消費者もみんなでプラスチックごみを減らしていく社会であることを知りました。今は、規制を厳しくするのではなく、一人一人が意識と行動を変えていくことが、日本に合ったやり方だと思います。これからの生活で、紙ストローを選んだり、過剰な包装を断ったり、エコバックを持ち歩くなど、自分にできることから私も行動していきたいと思います。

IV 研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

本研究の主題は「主体的に問題を追究し、よりよい未来について考える生徒の育成」である。目指す生徒像に挙げた、「(1) 主体的に問題を追究する姿」と「(2) よりよい未来について考える姿」を実現することができたかどうかについて以下に述べる。

【仮説1】

生徒の興味関心を高める教材提示の工夫をしたり、視点を整理する構造的な板書の工夫をしたりすれば、生徒が自ら問題を見いだし、知りたいという思いや調べたいという思いを高めて、主体的に追究に臨むことができるだろう。

生徒Aは、単元開始時、プラスチック製のストローと紙製のストローの違いに興味を抱き、調べ始めた。追究の振り返りに、「わざわざ紙製に変える理由が何か調べてみたい」や「海洋性プラスチックごみの問題について、もっと詳しく知りたい」、「みんなはどんなことを調べたのか聞いてみたい」と記述するなど、調べたいことを自ら考え、追究を修正したり、より詳しく情報を集めたりする姿が見られた。以上のことから手立て①が有効に働いたと考えられる。

追究について話し合う場面では、構造的な板書を見た生徒Aが「プラスチックにも紙にもメリットやデメリットがあることが分かった。でも、どちらのメリットとデメリットに関しても、環境に配慮することが大事だと気付いた」という気付きを振り返りに書いた。視点を整理して構造的に板書したことは、生徒Aに新たな気付きをもたらした。しかし、生徒自らが問題を見いだす姿については、資料を配付する手立て④の方が有効に働き、板書をきっかけとして実現することはできなかった。以上より、手立て②については検討の必要があると考えられる。

【仮説2】

生徒一人一人の立場を明確にした関わり合いの場を設定したり、これからの社会の在り方について考えたり、見方や考え方を広げる資料の提示をしたりすれば、問題の解決を通じて学んだことを自分の生活に生かそうとしたりすることができるだろう。

生徒Aは、「日本はプラスチックを規制すべきか」という問題について、ポジショニングで意思表示をする際に、最初は「規制すべき」という立場を選んでいった。しかし、追究を通してさまざまな事実と出会い、次第に「プラスチック産業の雇用を守ることも意識すべき」という考えをもつようになった。また「プラスチックに係る資源循環の促進等に関する法律」の資料に出合うことで、「プラスチックごみの問題は、規制を強めることよりも、企業や国の取り組みだけではなく、国民一人一人の意識と行動の変容が重要」という意見が変わっていった。自分の立場を明確にした話し合いや資料提示によって、よりよい社会の在り方や、追究を自分の生活につなげて考える生徒Aの姿が見られた。以上より、手立て③と手立て④は有効に機能したと言えるだろう。

2 今後の課題

本研究における課題は、以下大きく2点である。

- (1) 本研究では、自ら問題を立て、主体的に追究する生徒の姿を見ることができた。一方で、多様な環境問題や国の法律、企業の仕組みなど、複雑に関連する内容を正確に理解できない生徒が出た。難しい言葉の解説をどう扱うかについて今後の課題がある。
- (2) 本研究ではよりよい未来について考える生徒の姿は実現することができた。一方で、よりよい未来のために具体的に行動する生徒の姿は実現することができなかった。この点については、総合的な学習の時間などと連動させた、更なる実践を構想していきたい。